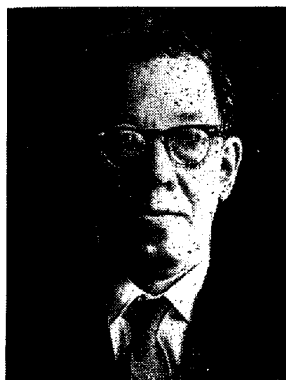


随 想

新年を迎えて

的 場 幸 雄*



謹んで新年の御慶びを申し上げます。

1970年は、当協会といたしまして国際的活動が最も盛り上りを見せた年でありましたが、昨1971年もまた劣らぬものがありました。

5月には Sweden から Royal Institute of Technology, Stockholm の Prof. Eketorp の一行の来訪を迎えて、鉄鋼製錬に関する Symposium を主催し、相互に有益でありました。また、秋には、第3回日ソ冶金物理化学 Symposium が Moscow で開かれ、盛京大教授を Leader として代表団を送り、これまた意義深いものでありました。因みに、第4回は1973年東京で開かれる予定とのことです。また、1967年 Sweden から迎えた鉄鋼使節に対する答礼の意をもつて、鉄鋼諸社の高級技術者を主体とし、通産省、日本鉄鋼連盟が加わり、当協会が幹事役となり、Norway, Sweden, Finland および Denmark の北欧4カ国に Mission を送り、先方諸国の鉄鋼関係者と交歓し、鉄鋼関連諸施設その他を訪問視察するなど、御互の交友を深めましたことも大きな成果であつたと思います。その他、兼ねて進められていた東南アジア鉄鋼協会が4月正式に発足し、今後濠州および日本の協力に依り、東南アジアにおける鉄鋼技術の普及が期待されることも記すべきことでありましょう。

さらに、1970年の国際鉄鋼科学技術会議の Proceedings 2巻が、会議後1カ年余で刊行されましたが、その内容は1970年における鉄鋼の科学技術の世界の水準を示すものとして貴重な資料となるであります。その編輯刊行に当たられました橋口委員長以下の方々のお勞を多とするものであります。

国内的には、恒例の春秋の講演大会は、いずれも盛況でありましたし、また地方支部の研究発表会あるいは、各種の特別資金による諸事業の遂行、諸委員会の活動などすべて順調に行なわれ、また委員会の成果の刊行なども相次ぎました。このように昨年度の本会の諸事業は、会員各位の御協力と事務局諸君の努力によりまして、概ね所期の目標を達することができましたことを深く感謝しております。

日本の粗鋼生産がその前年度よりも少なかつたのは、戦後は1962年1回だけでありました。その後殊に近年は年々約1千万tの増加を続けておりましたが1971年の生産はその前年のほぼ横這いと予想されまして、ほぼ10年振りの停滞であります。1962年のときはすぐその翌年から回復して、以後いわゆる60年代の大増勢を続けたのでありますが、今回の場合は諸般の情勢からみて、今後の成りゆきについては予想はきわめて困難とされております。

しかし、世界人口の増加とか、各国民度の向上、鋼材用途の拡大のごとき、世界の鉄鋼需要増を来す要素がある他面、品質の向上による使用量減とか、競合材料の進出などのごとき需要減を来す要素もあるものの、長期的展望に立てば、今後も世界の鉄鋼需要増は続くものと考えるのが妥当でありましょう。現在の鉄鋼生産の停滞は、たまたま米国の経済政策の転換から起こつた世界的な経済混乱による一時的なものと思われまますものの、70年代においては60年代のわが国が記録したような急速な成長は最早期待はできないのではないのでしょうか。

* 日本鉄鋼協会会長 東北大学名誉教授 新日本製鉄(株)常任顧問 工博

とすれば、今後は鋼の品質の問題が今まで以上の比重をもつて正面に押し出されてくることは明りようであります。質の問題は、量の問題に比べると、研究と生産の技術がより密着しております。それだけ学界・研究機関に対する期待もまた大きいと思われるのでありまして、当協会といたしましても、これに対応する適切な方策を検討すべきであります。

他に鉄鋼界の大きな問題の一つは、製鉄および製鋼工程の大筋が、現状のまま当分は持続されるかどうかの問題であります。現状の変更を求める一つの要因は、いわゆるエネルギーの問題であります。これにつきましては一昨年国際鉄鋼科学技術会議における Mr. Cartwright の特別講演はきわめて興味あるものであります。われわれもまた十分に研究して、それぞれの時点において常に適切な判断をなす用意があるべきであります。

次に、公害の問題もまたきわめて重要であります。原理的に明らかなことも、これを組織して、現在の工程に組入れて経済性を持たせることは容易ではありません。公害の問題は、生産技術に欠くべからざる問題として、早急にこれを解決しなければなりません。この点につきましても、特に焼結工場の大量の排煙中の SO_2 捕収に関して、当協会として前年来研究を進めて来たことはご高承の通りであります。

これらの事を通じて痛感しますことは、科学の細分化とその総合の問題であります。研究の進歩に従って分化され深度が深められてゆくことは事実であります。同時に総合化され組織化され、また境界分野が埋められて、生産の技術に結びつく場合が多いのも事実であります。「新たな技術の開発なくしては、今後の経済の発展はない」と言われております。日本の鉄鋼に関する技術は、先発諸国の水準に優るとも劣らないものとなつております。ここまでは、先発諸国の技術を導入し、それを習熟消化することによつて到達することもできたのであります。今われわれの前には、誰も踏み入れたことのない地域が拡がっております。日本の鉄鋼技術の真価が試されるのはこれからであります。

会員の皆様とともども、この末踏の領域に向つて歩を進めたいものと存じます。